

うか、喉を潰しちゃいけないとか、体調崩しちゃいけないとか気にしなくていいので、のびのび歌えちゃう。だからより楽しかったのは否めない（笑）」

—— アルバム発売のひと月後に全国ツアーが始まって走り抜けた3カ月でしたね。

「アルバムは自分の思い通りに作れて自信もあったけど、ツアーに関してはちょっと不安もあったんですよ。喜んでくれるかなって、今までの自分のスタイルと違う部分も多かったし。万丈さんの声から始まるっていうのもそうだし、ハンドマイクで歌うっていうのもそうだし。でも最初からお客さんも盛り上がってくれていたし、やっていたことが間違ってたかったって手応えがあって楽しかったです」

—— 特に終盤の“SUN”“Week End”“時よ”の3曲の客席の熱狂は、星野さん自身もラジオでもおっしゃってしましね。

「『ダ・ヴィンチ』のエッセイ連載にも書いたんですけど、お客さんみんながバラバラに踊ってるってほんとに嬉しかったんです。手を左右に振ったり、指を指したり、拳を突き上げたり、曲に合わせて同じ動きをするっていうのは日本の文化としてあるんだけど、アメリカのジャズフェスティバルでもそうですけど、お客さんが一人ひとり好き勝手に楽しんでいる、自分の踊り方で踊っているっていうのは日本ではまずない。クラブとか EDM 系のイベントではあるけど、生演奏のアリーナクラスのライブではまずないんですよ。それが自分のステージで見られたのがもうとにかく嬉しくて。しかも俺がそうしてくれとお客さんに言ったわけでもなかったし。さいたまの1日目に客席を見たらみんなばらばらに自分のダンスを踊って、“なにこれ最高じゃん、この景色！”ってそれにすごい興奮してちょっと泣きそうになったんです。人がやっていないことをするのは恥ずかしいというのはもう日本人の国民性だからしょうがないのかもしれないと思ってたんだけど、自由に音楽を楽しむ、その楽しみ方をみんな知っているじゃん！って感動しました」

—— 我を忘れる、線が切れちゃった風船のような自由さでしたよね。

「うん。しかもホールやアリーナって椅子がちやんと割り振られているから、我を忘れにくい場所だと思うんですよ。いやーあれは見てて気持ち良かった。“SUN”で金テープが飛んで、そのあとに“Week End”でさらに盛り上がってお客さんがワーッと踊る時なんか、会場がキラッキラしてるんだよ」

—— その盛り上がりのあとに、ニセ明さんも空を飛んで移動して“君は薔薇より美しい”を熱唱されて。ニセさんにもまた会えるのかは気になりますね。

「ニセさん、どんどん人気になってきてますから（笑）」

—— これは余談になりますが、会場に置かれていたニセさんのパネルがあったじゃないですか。さいたまスーパーアリーナで、そのニセさんパネルが撤収される瞬間を撮影してネットに上げているファンの方がいらして。その方はたぶん一人で撮っていたと思うんですが、それが寂しいんですよ。数時間前はたくさんの人に囲まれていたのに……。ガードマンの方がニセさんを脇に抱えて去っていく。ニセさんの哀愁を感じました。

「切ないよね。ニセさんって常に一人ぼっちなんですよ、實さんじゃないけど。孤独なアーティストなんです。ライブの時だけお客さんのところに出てきて」

—— そしてアンコールの“Friend Ship”では、泣いているお客さんも多かったです。それこそ“YELLOW VOYAGE”だから旅の終わりじゃないですか。お客さんにもそれを見届けるのだという緊張感が妙にあったと思います。冒頭の“地獄でなぜ悪い”の話にも繋がりますがラストの曲も早い段階で決められていたのでしょうか。

「はい。最後の曲は1曲目と同様、『YELLOW DANCER』から決めていました。ちゃんと前を向きたいというか、未来を見て終わりたいと思ってたんです。（いつかまた 会えるかな）という歌詞も含めて一番いいなって。アウトロでギターを弾いたんですけど、あの曲を作った時は、ギターを弾きながらみんな合わせて作っていったんですよ。その時にアウトロを好きに弾いて楽しかったという思い出があって。それを思い出して、ライブでもギターを背負ってやってみよう。もう歌わなくてもいいし、マイクも